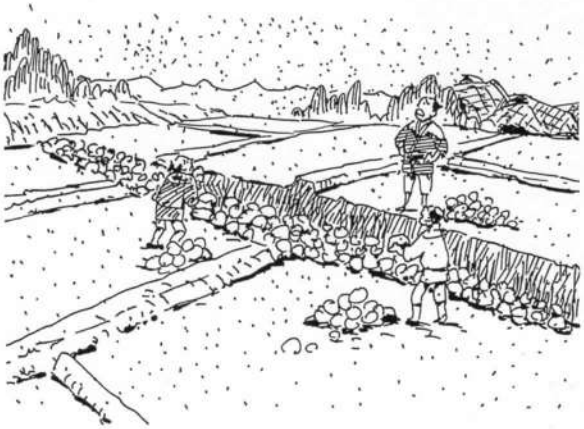
安房の百姓一揆「万石騒動」

2011年は、「万石騒動」と呼ばれる百姓一揆がおこって300年たった年です。地域の人びとは300年祭の実行委員会をつくり、百姓一揆で犠牲になった農民たちのために300年祭の記念のつどいをおこないました。なぜいまも、江戸時代におこった出来事を供養しているのでしょうか。どんな百姓一揆であったのかを見てみましょう。

元禄大地震からの復旧

1638年から1712年まで安房国の北条村（館山市）など27か村は、北条藩領とされ、屋代家が治めていました。藩主はふだん江戸屋敷にいて幕府の仕事をしています。領内は北条村にある藩役所の家臣や代官たちが支配していました。1万石の領地は「万石村」とも呼ばれていました。

1703年に房総沖を震源に推定マグニチュード8.2の元禄大地震が関東南部を襲い、大津波がおこりました。北条藩の領地では地盤が6メートル盛りあがったところもあり、家屋や人の被害だけでなく、山くずれや水涸れで田畑が荒れてしまいました。そのあとには富士山が大噴火して灰がふったりもしました。耕作できない田畑がふえ、そのうえに冷害もかさなったので農業の生産はへって、年貢収入にたよっていた北条藩の財政はとても苦しくなりました。



財政を立てなおすために、藩主は、関西の進んだ農業技術にくわしい、川井藤左衛門という人物を家老として雇いました。まず川井は元禄大地震でうしなった田畑を取りもどすために新田開発をおこないました。地震で盛りあがった土地には、すみずみまで水を引くために、川の水をせきとめて溜池をつくりました。新たなかんがい用水路をとおしていく大土木工事でした。そのかんがい用水路は、今日も使われ、「川井堀」と呼ばれています。

農民たちへの重い負担

荒れた耕地を整備し農業を立てなおす大土木事業に、多くの農民たちはただ働きを強制されました。また、耕地の整備や用水路をつくりなおすには、お金が必要だったので、一部の商人たちには、藩内での商売を独占させることを条件に、藩にお金を納めさせました。その結果、ものの値段が上がり、農民たちの生活がかえって苦しくなりました。農民たちは不満をつのらせていきました。

さらに、藩の管理下にある北条村の鶴ヶ谷などの保安林や、寺社境内にあったご神木の大木を伐採し、木材として江戸で売りはらいました。この伐採作業では、田植えでいそがしい時期の

農民たちを駆りだしたので、農民たちの不満はさらに高まりました。

そんな1711年の秋、家老の川井藤左衛門は藩の財政をもっとよくしようと、年貢をふやすことにしたのです。

江戸時代には、年貢は、田を上中下の3ランクに分け、それぞれのイネの出来を検査して、収穫に応じて決める方法をとってきました。万石騒動がおこった年に川井が実施したやり方は、上田のなかでも最上級の出来高だった田だけを調査し、ほかの田の収穫の基準にするという乱暴なものでした。この方法によって、27か村から集められる年貢米は6000俵ふえると見こんだのです。

農民の負担は例年の2倍となりました。自分たちの手もとに米が残らなくなるほどの重税であったため、その不満はいっきに爆発したのです。

万石騒動のはじまり

農民たちは、名主をとおしておこなう通常の訴えの方法ではなく、数百名の者たちが蓑と笠を身につけて、10日間にわたって北条村の藩役所へ出むく方法をとりました。その訴えの内容は、「過去10年のなかでも一番高かった年とおなじ率でもよいから、年貢をへらしてもらいたい」というものでした。

しかし、すでに江戸に帰っていた家老の川井から命令を受けていた郡代と代官は、訴えを拒絶したばかりでなく、農民たちをおどかしにかかったのです。

その年の11月、要求が聞き入れられないとみた農民たちは、数百人で藩主が住んでいる江戸屋敷に押しかけ、門前で蓑と笠を身につけて訴えにかかりました。それは竹竿の先に願書をさしこんで門前から直接藩主に渡すという方法、「門訴」と呼ばれているやり方でした。

当時は、もし代官のほうに問題があれば、農民が直接幕府に訴えでることができました。農民あっての領主であり、領主らしい責任ある政治をやってもらいたいと、農民たちはねがっていました。そのような政治をめざしていたのが、当時将軍を助けていた新井白石でした。

ちょうどそのころ、朝鮮国の外交使節団である朝鮮通信使が江戸にきていました。11月1日は、朝鮮国王からの国書が、将軍にわたされる一番重要な日でした。その翌日こそ、北条藩の

三義民の供養塔（館山市国分、国分寺境内）

農民たちが意を決して江戸に到着した日でした。

朝鮮通信使をむかえてのものものしい警備のなかで、外国からのお客を一目見ようと江戸の町はお祭のような騒ぎでした。「門訴」をおこなう前日に、農民たちの実力行動におどろいた川井らは、朝鮮通信使がきているときはおとなしくしてほしい、という内容の文書を農民たちに手わたしました。

それを見た農民たちはこの態度に激怒して、「門訴」を決行したのでした。数百人の農民たちは、幕府にとって朝鮮国の外交使節団がきているだいじなときであっても、藩の非道なやり方を訴えて、自分たちの命がかかる切実な声をあげたのです。

この時期に、領民たちの門訴が江戸のうわさとなり、幕府に知られるのは、北条藩にとってとてもまずいことでした。川井は、農民たちの要求をのんだふりをし、年貢をへらすと約束した文書をあたえて、農民たちをいったん安房に返しました。

農民側の勝利と三義民の供養

しかし北条藩は、農民たちを裏切ったのです。その後北条村の藩役所にやってきた川井たちは、年貢をへらすことを約束した文書を取りもどすために、6人の名主を見せしめとして牢獄に入れました。

再び農民たちは江戸に出かけ、こんどは幕府にむけて、必死になって藩の非道を訴えかけたのです。しかし幕府は取り上げてくれませんでした。そのころ朝鮮通信使が江戸を出発し、江戸の町は落ち着きを取りもどしていました。

川井は藩の牢獄にいる6人のうち3人を斬首にしました。そして、残りの名主も追放の刑にしました。力づくで農民たちを屈服させようとしたのです。

江戸で処刑の報を聞いた農民たちは、ついに、江戸城に登城する老中たちが乗った駕籠に訴える「駕籠訴」をおこないました。その熱意がとうとう幕府を動かし、老中たちは訴状を取りあげました。あわてた北条藩は、幕府に訴状の取りさげをねがい、仲裁も申し入れましたが、間にあいませんでした。

12月になり幕府の裁きがでました。訴えがみとめられ、農民たちが全面的に勝ったのです。年貢は例年どおりとなり、藩主の領地は没収されました。川井藤左衛門とその子は死罪となりました。

当時、百姓一揆は、「一揆」「騒動」「願い出」などといっていました。人びとは万石村でおこった一揆だったので、「万石騒動」と呼びました。農民たちが全面的に勝利したとはいえ、それは3人の名主の犠牲によって達成されたのでした。27か村の農民たちは、彼らを「三義民」としてたたえ、その後、館山市にある国分寺内に3基の石碑を建てました。人びとは、300年たったいまも3人の名主たちの供養をつづけ、農民たちの闘いの歴史を大切にしています。

（愛沢伸雄）